

テクネ・マクラ「芸術は永し」

# TEXNH MAKPA

女子美術大学歴史資料室ニュースレター

第 10 号



藤田文蔵考案 私立女子美術学校校章  
昭和4～23年（1929～1948）

## 特別ニュース

# にら さき おおむら び じゅつ かん 葦崎大村美術館収蔵作品展開催によせて

小川 玲美子 (歴史資料室学芸員)

平成28年(2016)9月9日(金)より10月8日(土)まで、女子美術大学は、本学名誉理事長大村智先生のノーベル生理学・医学賞受賞を記念し、「葦崎大村美術館収蔵作品展」を女子美術大学杉並キャンパス1号館1階110周年記念ホールにて開催しました。本展では絵画及び工芸作品全33点と、大村智名誉理事長の幼少期から現在に至るまでの資料を一挙にご紹介しました【写真】。

本学の建学精神は、明治33年(1900)の創立から現在に至るまで、「芸術による女性の自立」「女性の社会的地位向上」「専門の技術家・美術教師の育成」の三つに徹底されています。近代日本において、女性が自立して芸術活動を営むことは困難に満ちていました。本学創立時、我が国唯一の官立美術学校であった東京美術学校(現東京藝術大学)では女子の入学は許可されておらず、昭和21年(1946)になってようやく認められたことから、画家や芸術家を目指す若い女性の受け皿が限られていたことがうかがえます。

もともと、近代における女性の立場自体、決して確立されたものではありませんでした。明治末期から大正期にかけ、手に職を持った職業婦人が誕生し社会に進出しましたが、大正14年(1925)に日本初の普通選挙法が制定された際、参政権が与えられたのは男性のみでした。戦前の日本において、女性には国政に参加する権利は認められていなかったのです。

そのような時代にあって、本学が前述の三つの事項を教育目標として掲げたことは意味深く、また社会に対する大きな挑戦でもありました。そして、この度開催されました葦崎大村美術館収蔵作品展に出品している作家の中には、この建学精神の下で在学時より研鑽を積み、卒業後、自身の芸術活動を以って「芸術による女性の自立」「女性の社会的地位向上」「専門の技術家・美術教師の養成」を実践した人物が多々見出されます。

例えば《ぼら》を描いた亀高文子は、本学創立間もない明治35年(1902)に西洋画科本科普通科に入学し、卒業後の大正7年(1918)に我が国初の女性

画家公募団体である「朱葉会」の創立に参加し、「芸術による女性の自立」を促しました。

また三岸節子、森田元子【図1】らは昭和22年(1947)、女性画家の地位向上を目指して女流画家協会を発足させました。現在、同協会には著名な女流画家が数多く在籍しています。

柔らかな筆致ながら、力強さを感じる女性が印象的な《ヘーマ・パンディ》【図2】を描いた三谷十糸子は、本学卒業生初の校長として、長く後進の指導にあたりました。

今回展示された33点の作品からは、創立時から一貫した本学の教育理念の下、情熱を持って芸術活動に励んできた女性作家たちの軌跡をみることができます。女性の立場が目まぐるしく変化していった近現代、彼女たちが何を見つめ、作品として表出していったのかがうかがえるようです。

このように本学卒業生、ひいては女流芸術家達の作品を一望できるのは、葦崎大村美術館の所蔵品が潤沢であるからです。

葦崎大村美術館は平成19年(2007)に大村智名誉理事長に

よって郷里、山梨県韮崎市に設立されました。大村智名誉理事長はお母様の影響もあって、幼少期から芸術に大きな関心を寄せており、平成5年（1993）に本学理事に就任したことをきっかけに、本格的に本学卒業生の作品のコレクションを始めました。

韮崎大村美術館には、大村智名誉理事長の40余年の収集活動による一大コレクションが収蔵されており、特に本学卒業生の作品数は他に類を見ません。平成20年（2008）には本学と相互協力協定を結んでおり、相模原キャンパス女子美術大学美術館では何度か韮崎大村美術館の作品をご紹介する展覧会が開催されました。しかし残念なことに、杉並キャンパスでは今までその様な機会に恵まれたことはありませんでした。今回、大村智名誉理事長のノーベル賞受賞を記念した展覧会を、多くの著名な女流芸術家達が学んだこの杉並キャンパスで開催できることは大変名誉なことであり、貴重な機会となりました。

本展を通し、在学生、卒業生のみならず、多くの方に本学の名誉理事長が本学の教育理念を尊重した偉大な科学者であると知っていただければ幸いです。



【写真】 韮崎市立韮崎大村美術館外観  
写真提供 韮崎大村美術館



【図1】 森田元子《花》1968年、油彩、キャンバス  
韮崎市立韮崎大村美術館蔵



【図2】 三谷十糸子《ヘーマ・パンディ》1970年代、紙本着色  
韮崎市立韮崎大村美術館蔵  
『韮崎大村美術館所蔵 響きあう女性美術家の世界展』  
財団法人茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団、2012年より

## 女子美列伝

# 亀高 文子

小川 玲美子 (歴史資料室学芸員)



亀高文子ポートレート  
『特別展 神戸の美術家 亀高文子とその周辺』  
神戸市立小磯記念美術館、2009年より

亀高文子(旧姓:渡辺ふみ子)は明治19年(1886)、横浜に生まれました。水彩画家である父渡辺豊次郎の下、幼い頃から外国の美術書を見て育った文子が成長するにつれ、画家を志すようになったのはごく自然なことでした。

明治35年(1902)、文子は日の出女学校を2年で中退し、開校から僅か2年余りの私立女子美術学校西洋画科本科普通科に入学します。文子が入学した当時の私立女子美術学校は大変な混乱期にありました。前年に経営上の対立から相次いで学校設立発起人が辞退し、創立して1年足らずで本学は廃校の危機に陥ります。翌年には本学創立者の横井玉子が逝去し、学校は精神的支柱を失ってしまいました。

そのような状況にいて、文子の洋画への熱意は失われることはありませんでした。文子は『神戸新聞』の連載、「我が心の自叙伝(一)」(『のじぎく文庫』神戸新聞学芸部、1967年)において、女子美時代を振り返り次のように語っています。ここからは当時の女子美生のユーモラスな悩みが伝わってきます。

「在学中で楽しかった記憶は、日曜日には不忍池などへ暑中休暇にはくげぬま おんじゆく 鶺鴒沼や御宿(千葉県)などに写生に出かけたことでした。

「おーい、女が絵を描いとるぞー」とやじ馬がやじ馬を呼んで私たちに恥ずかしがらせた当時ですが、不忍池で画架を立てていた時に、山本かなえ鼎さんや石井はくてい柏亭さんが通りかかって、親切な助言や、批評をしてくれたことなど、若い私たちの娘心に、絵の勉強の楽しさを加えてくれたエピソードの一つです」

明治40年(1907)に私立女子美術学校西洋画科本科高等科を卒業した後、文子は小杉みせい未醒(放菴)の紹介で洋画家満谷国ほうあん みつたにくに四郎しろうに師事し太平洋画会に入所しました。同年、上野で開催された東京勸業博覧会に《杉の森》という作品を出品しています。ちなみにこの東京勸業博覧会には本学の学生作品も出品されていました(本号5頁参照)。

その後、同じく太平洋画会に所属していた長崎県出身の画家、渡辺与平(旧姓宮崎、当時19歳)と結婚し、二児に恵まれましたが、夫の与平は結婚からわずか3年後の大正元年

(1912)に死去。文子は幼子を抱えた未亡人となってしまいました。大正2年(1913)、第7回文展に出品した《離れ行く心》は、与平が文子をモデルとして描いた習作を下地に文子が加筆をしたものです。憂いを帯びた文子の表情からは、夫を亡くした女のもの悲しさが伝わってくるようです。

しかし、そのような悲しみを乗り越え、文子はますます芸術への情熱を燃やしていくこととなります。それは画業のみならず、女性画家の支援活動にも向けられ、大正7年(1918)には日本初となる女性のみ美術団体、「朱葉会」の設立に参加しました。この朱葉会は現在まで続いており、日本における女流画家の育成に大きく貢献しました。その後移り住んだ神戸の地で女子を対象に油絵を教えたことをきっかけとし、大正4年(1915)に赤艸社女子洋画研究所を発足させました。文子は当時珍しい地方における女子美術教育を成功させたのです。

晩年まで精力的に制作を行っていた亀高文子は、昭和52年(1977)、91歳でこの世を去り

ました。

自身の制作の他にも女性の芸術教育、運動に情熱を傾けていた亀高文子は、本学が開校以来建学の精神としていた、「芸術による女性の自立」「女性の社会的地位向上」「専門の技術家・美術教師の養成」をいち早く実践した画家と言えるでしょう。



亀高文子《離れ行く心》1913年、油彩  
泉屋博古館分館蔵

『特別展 神戸の美術家 亀高文子とその周辺』  
神戸市立小磯記念美術館、2009年より



亀高文子《ばら》制作年不詳、油彩  
葦崎市立葦崎大村美術館蔵

本作は2016年女子美術大学杉並キャンパスで開催された「大村智名誉理事長ノーベル生理学・医学賞受賞記念 葦崎大村美術館収蔵作品展」にも出品された(本号2頁参照)。

## コラム

### 東京勸業博覧会二等賞メダル

小川 玲美子 (歴史資料室学芸員)

東京勸業博覧会は明治40年(1907)、東京府(現在の東京都)が主催となり、上野公園、不忍池畔で開催されました。

この博覧会第一部「教育、学芸」の第六類「専門学校」において、本学は日本画、西洋画、刺繍など、計12点の生徒制作品を出品しました。作品は凹型をした第一号館の右方に展示され、二等賞を獲得しています。『東京勸業博覧会審査報告 巻壹』では、受賞の理由が次のように述べられています。

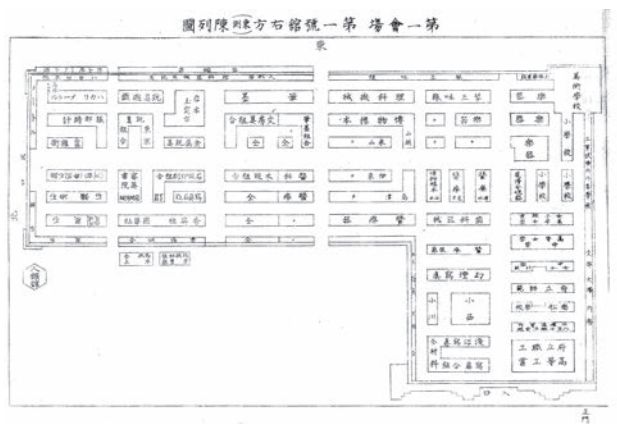
「私立女子美術学校の出品は和洋画額外十一種十二点にして日本画、西洋画、刺繍、造花、編物、裁縫、音楽、割烹等の各学科生徒の製作(ママ)に係るものなり。而して是等製品(ママ)は大体に於て其の成績佳良なりしか就中造花大花環は材料の精選、彩色の配合等其の宜しきを得優に此の種出品中の逸品たるに足れりき。蓋し

同校は専ら力を女子の技藝教育に盡し、年々多数の生徒を養成すれども其の創立日尚浅きを以て学校経営の実績は之を評隲するを得ざれども、将来益力を生徒の

訓育に致し、一層女子技藝教育の本領を發揮するに努むれば、望を囑するに足るものあるをみとむ。而して同校出品に対し、二等賞を擬し且右出品中成績優良なりし造花の製作に関して効勞ありたる同校幹事磯野吉雄に協賛賞を受与せり」

また、当時の社会風俗を紹介する雑誌、『風俗画報』増刊号は、「女子美術学校の洋装和装双美人人形、衆目の惹く所となる」と本学の出品物を伝えています。

残念ながら出品作品の写真等は



東京勸業博覧会 第一号館右方陳列図  
『東京勸業博覧会実記』重寶新聞社、明治40年(1907)より

現在発見されておらず、詳細は不明ですが、この二等賞のメダルは、本学が明治33年(1900)の創立から僅か7年余りで社会的に認められる技術を持った学生を育てていた証と言えるのではないのでしょうか。



東京勸業博覧会二等賞メダル 明治40年(1907)

## 女子美列伝

# 羅 蕙錫 ナヘソク 女子美を卒業した韓国初の女性西洋画家

梁 丞延 (ヤン・スンヨン) (歴史資料室学芸員)

女子美術教育への門が再び開かれた明治33年(1900)以降、中国、韓国、台湾から時代の先駆者というべき、多くの女子留学生が本学へ学びにきました。今回はその一人、韓国(当時朝鮮、以下省略)から西洋画を学びにきた韓国初の女性西洋画家であり、フェミニスト作家として知られる羅蕙錫(1896～1948)をご紹介します。

蕙錫は、韓国の首都ソウル(当時京城)から南に約35km離れた水原スウォンに生まれました。その家系は、祖先時代ホ、ジョチャンバンに戸曹參判(現財務・内務省次官)を歴任するなどの名門家で、蕙錫の5人兄弟の内、4人が日本へ留学するほど経済力のある家でしたが、理想の女性像として良妻賢母が強調されていた当時、父親からの結婚強要を拒否し、本学へ入学します。本学を紹介し、留学を可能にした人物は、当時、東京高等工業学校(現東京工業大学)の学生であった兄・景錫キョンスクでした。蕙錫は、大正2年(1913)に本学の西洋画科に入学します。朝鮮から4番目の美術留学生、当然ながら女子としては初めてでした。水原からソ

ウルへ、そして釜山プサン行きの汽車に乗り、下関行きの関釜連絡船に乗り換え、東京へ行く4日間の旅程。当時中退者も多かったものの、蕙錫は、選科普通科から高等師範科に進学し、大正7年(1918)に本学を卒業します。

大正10年(1921)にソウル初の洋画個展を開き、韓国近代女性美術史の第一歩を踏み出します。翌年は第1回朝鮮美術展覧会に出品、第11回(1932)まで世界一周した期間を除き、毎回の入選と特選を重ね、昭和6年(1931)帝国美術院展覧会に入選します。また、昭和8年(1933)には女子美術学舎を創立するなど、後進育成にも力を入れました。

蕙錫は数多くのエッセイも書き残しました。女子たる前に人間であり、画家である自己を自覚し始めた蕙錫は、大正デモクラシーと称する新しい思潮が溢れるなか、『青鞜』『白樺』といった文芸雑誌に書かれた「新しい女」について、強く影響を受けます。在学中に書いた「理想的婦人」(『学之光』、1914)、「瓊姫」(『女子系』、1918)をはじめ、韓国に戻り画家活動と両立



羅 蕙錫

『私立女子美術学校第廿二回私立佐藤高等女学校第一回卒業生記念帖』大正7年(1918)3月

しながら、「友愛結婚、試験結婚」「離婚告白書」「欧米女性を見て半島の女性たちへ」など、体験的な女性論(人間論)を新聞や雑誌で発表し、韓国社会に大きな反響を巻き起こしました。留学時代は、蕙錫の芸術家としての方向を決める重要な時期でもありました。

時代を先取り、先駆者として活躍した蕙錫の作品は、残念ながら、官展に出品した作品をふくめ、ほとんど残っていません。約400点のうち、所在不明380余点。残された文を手掛かりに、画家羅蕙錫を見直す動きが進んでいるなか、歴史資料室でも今後新たな発見ができれば、ご紹介したいと思います。



在学当時の授業風景 大正4年(1915)

### 参考文献

徐正子서정자『羅蕙錫文学研究나혜석문학연구』韓国: PRUNASNG 푸른사상, 2016年

羅英均『日帝時代、わが家は』小川昌代訳、みすず書房、2003年

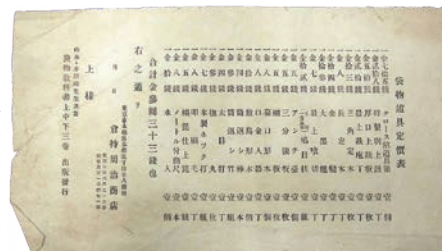
## コラム

### 売店のはなし ～クラモチからイワタまで～

梁 丞延 (ヤン・スンヨン) (歴史資料室学芸員)

本学敷地内に売店が開設されたのは、昭和10年(1935)頃からであります。和田時代(本郷区菊坂町から杉並区和田本町に移転)の幕が開いた当時は、売店は校门近くの建物の地下にあり、平成2年(1990)相模原校舎が開校し現在に至るまで、本学と歴史をとともにしています。それが現在のイワタ売店です。その前身とも言える売店倉持周治商店は、実は本学が本郷区(現文京区の東部)にあった当時は敷地外(本郷5丁目)に位置しており、材料の販売はもちろん、オリジナル材料の製作や本学の教員が執筆した教科書の出版

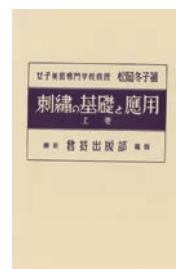
も行っていました【写真1～3】。いつ頃からその役割を果たしたのかは定かではありませんが、大正6年(1917)頃、イワタ売店の初代社長が倉持周治商店に就職したことから、菊坂時代にはすでに縁を結んだと思われます。和田校舎にイワタ売店が開設され、しばらくは倉持製の材料を販売しており、教科書の出版も行ったことが、歴史資料室所蔵資料から分かりました。現在、イワタ売店は材料の製作や教科書の出版などは行っていませんが、100年近く、本学歴史の証人としてともに歩んでいます。



【写真1】倉持周治商店が発行した袋物道具定価表



【写真2】倉持製の刺繍糸巻



【写真3】松岡冬子『刺繍の基礎と応用(上巻)』倉持出版部、昭和7年(1932)

## 歴史資料室日誌 2016年1月～9月

### 1月

- 北区飛鳥山博物館春期企画展「糸と光と風景と—刺繍を通してみる近代—」のために資料貸与・画像提供。
- 坂原富美代著『夢二を変えた女(ひと) 笠井彦乃』(論創社、2016年6月)のために画像提供。

### 3月

- 韓国水原市立アイパーク美術館開催展覧会「羅蕙錫生誕120周年」のために画像提供。

### 4月

- 平成28年度入学式にて、学校史パネル展示。(東京・中野サンプラザ)



入学式 パネル展示の様子

- 新1年生が受講する基礎学習ゼミの自校史教育協力(4月～5月)。

### 5月

- 女子美術大学歴史資料展示室にて展覧会「平成28年度収蔵資料展 収蔵資料にみる女子美の歩み」開催。一部のコーナーにて大村智名誉理事長の功績を展示(協力：葦崎市教育委員会、葦崎市ふるさと偉人資料館)(5

月13日～2017年3月12日)。



展示会場

- 株式会社広域高速ネット二九六特別番組「佐倉が生んだ女子教育の先駆者 佐藤志津～女子美術大学の再興とその精神～」のために画像提供、原室長取材。
- 一般財団法人女子美術大学同窓会企画展「刺繍をまなぶ」の記録誌のため画像提供。

## 6月

- 千代田区男女共同参画センター企画展「女性の高等学校・実業教育の黎明期」のために画像提供。
- 平成28年度第1回歴史資料整備委員会開催。
- 一般財団法人女子美術大学同窓会創立100周年史のために同窓会会報など提供。
- 埼玉県立新座総合技術高校生徒インターンシップ受け入れ。



資料カード作成

## 7月

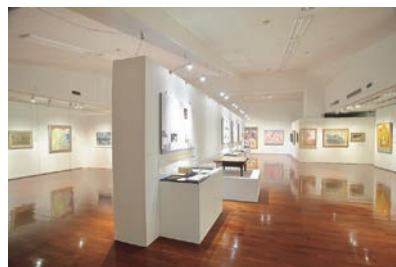
- 株式会社イメージブレーン自主記録映画「あるアトリエの100年」のために画像提供。

## 8月

- 『画家羅蕙錫』（韓国：ナムスプ出版社、2016年下半年期）のために画像提供。

## 9月

- 女子美術大学主催大村智名誉理事長 ノーベル生理学・医学賞受賞記念「葦崎大村美術館収蔵作品展」の企画・展示協力。



展示会場

- 平成28年度第2回歴史資料整備委員会開催。

## 寄贈報告 2016年1月～9月

作品・資料をご寄贈いただいた方の御名前を記し、感謝の意を表します。(寄贈順)

- 桜田悠子氏 桜田津祢の学生時代作品他1点
- 佐藤和子氏 卒業証書他6点

## 情報提供・ご寄贈のお願い

女子美術大学歴史資料室では本学の学校史・教育に関する歴史資料の収集を行っており、特に創立期から戦前期の情報・資料が不足しております。

当時の教材、課題作品、写真等お持ちでご寄贈いただける方は、歴史資料室までご連絡くださいますようお願い申し上げます。

※ご厚意に沿えない場合もありますので、あらかじめご了承ください。またご寄贈いただいた資料の取り扱いは、歴史資料室に一任ください。

## 表紙写真

藤田文蔵考案 私立女子美術学校校章  
昭和4～23年（1929～1948）

本学創立発起人の一人であり、初代校長である藤田文蔵がデザインを考案した私立女子美術学校校章。三種の神器・八咫鏡の中に「美」の文字を配置した。昭和12年（1937）頃の校章規程によれば、校章は各自左腕に佩用するものと書かれ、卒業生記念帖などでその様子を見ることが出来る。この校章は、現在も入学の際に学生に配られている。

テクネ・マクラ 「芸術は永し」  
**TEXNH MAKRA** 第10号

女子美術大学歴史資料室ニューズレター  
発行日：2016年10月1日  
編集・発行：女子美術大学歴史資料室  
デザイン担当：竹田奈那子  
制作・印刷：株式会社 日相印刷

〒166-8538 東京都杉並区和田1-49-8 女子美術大学1号館1階  
TEL：03-5340-4658 FAX：03-5340-4683  
E-mail：heritage@venus.joshi.ac.jp  
URL：http://www.joshi.ac.jp/history/

 **女子美術大学**



『女子美術大学歴史資料室ニューズレター TEXNH MAKPA (テクネ・マクラ)』第10号  
正誤表

下記のとおり誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

ページ	誤	正
7 (右段、下から3行目)	一般 <u>財団</u> 法人女子美術大学 同窓会	一般 <u>社団</u> 法人女子美術大学 同窓会
8 (左段、上から8行目)	一般 <u>財団</u> 法人女子美術大学 同窓会 <u>創立</u> 100周年史	一般 <u>社団</u> 法人女子美術大学 同窓会 <u>設立</u> 100周年史

(2016/10/29 改訂)